

〔館員報告〕

政治の中での陶磁器

—中国・五代十国時代の呉越国における例—

2007年に中国浙江省杭州に滞在し(図1)、10世紀に杭州を中心に呉越国(907-978年)を興し、仏教を信奉した銭氏一族に関連する史蹟を中心に調査研究を行ってきました。浙江省には当時の青磁生産の中心であった越州窯(越窯)も築かれていました。

漢の時代1世紀に成る青磁は、越州窯が名高く、言葉の由来は解釈が分かれるものの晩唐時代には既に「秘色」と称されました。中国・陝西省西安の西に位置する法門寺では唐・咸通十五年(874)に行われた舍利供養の際に大量の宝物が塔の地宮(宝物を納める場所)に奉納され、当時の一級品を今に残していることでも重要です。この法門寺の石碑「法門寺遺物張碑」には奉納した宝物が記されており、そこに越州窯の青磁が「瓷秘色碗」「瓷秘色盤子」と記され(図2)、実際の出土品にこれに当たる青磁が確認されています。越窯は唐時代には進貢のための製品を焼造する窯が余姚県上林湖に築かれていたことが指摘されています。

これらの越州窯青磁は唐時代に陸羽の茶に関する書『茶経』において、当時華北で台頭してきた邢窯の白磁と比較され、邢窯の白磁が銀や雪に、越窯の青磁は玉や氷に喩えら

れています。さらに邢窯白磁が越窯青磁に及ばない理由として茶を入れたときの茶の色の違いがあげられており、この書の中では茶に適したものと第一に越窯の茶碗が挙げられています。大寺院の奉納品に見られ、茶事における最良の碗として挙げられている越州窯青磁は、また、政治の上でも重要な役割を果たしています。

越州窯が位置した現在の浙江省杭州周辺は、五代十国時代になると銭氏が治める呉越国の領土内になります。呉越国王の銭氏はこの青磁窯を保護し、技術及び質の高い青磁が造られます。越州窯の青磁は呉越国にとって宝であり、特産品でした。杭州近くの臨安にある初代呉越国王銭鏐の母親水邱氏(901年没)や第二代国王銭元瓘(天福六年：941年没、942年埋葬)など王族の墓からもこの秘色青磁が出土しています(図3)。

呉越国は五代十国時代の十国の中で最も長命で(907-978年)、比較的政情が安定していたために、仏教や文化の高い発展をみます。この要因の一つには、当時華北の覇権を取った五代の国々に対して従属の態度を常に示す方針を採っていたことがあげられます。

文献上に記録の残る範囲で、呉

越国王が他国に秘色磁器を贈ったと記す事例は6度認められます。その事例の前後の事柄に鑑みると、「呉越王」または「呉越国王」の爵位授受と秘色磁器の献上が深く関係していることが見てきます。(以下、引用は『十国春秋』・『冊府元龜』・『宋会要輯稿』から筆者訳、下線付す)

初めの記事は後唐の同光二年(924)に見られ、「秋九月、王(銭鏐)は銭詢を使い遣唐(後唐)に銀器越綾呉綾及び…秘色磁器…等を貢ぎ、金印・玉冊を賜ることを求め(国王の爵位を求めた)、後唐主は銭氏の意に従う」とする内容で、秘色青磁を含めた特産品を貢ぐことでその地方を治めていることを示すと共に、統治者と認めることを迫っています。

次の記事は第二代国王銭元瓘の時代で、後唐・清泰二年(935)に「九月、王は後唐に綿綺五百疋・金彩食器二千両・金縷秘色磁器二百件を貢ぐ」とあります。銭元瓘は銭鏐の没した932年に実質的には国の統治者となりますが、後唐が「呉越王」に封じるのは934年で、その翌年に秘色青磁を献上しています。

3度目は第三代国王銭弘佐が、天福六年(941)に後唐を滅ぼした後晋より「呉越国王」に封じられた翌年、942年に見られます。「十一月、王は後晋に鉶銀五千両と絹五千疋と糸一万両を貢ぎ国王に封じた恩に感謝する、また弓や扇等物また…秘色磁器…等を献じた」とあり、国王の称号を得たことに対するお礼の献上物に秘色磁器が含まれています。

第四代国王銭弘俦は天福十二年(947)に即位し、八月に後漢により「呉越王」に封じられていますが、その年の十二月には軍部のクーデターにより国王を廃され、幽閉されてしまいます。銭弘俦の極めて短い在位期間に秘色磁器献上の記事は見られません。

4度目は第五代国王銭弘俶によって、後漢に献上されます。「乾祐二年(949)…十一月、王は判官を使い後漢に御衣・犀帯金銀装兵仗・綾絹・茶・香・藥物・秘色磁器…等を貢ぐ」とあり、この年の3月に銭弘俶が「呉越国王」の称号を授けられた後の進貢です。

後漢の後に後周が立ち、その禅譲を受けて北宋が建国された後、開宝元年(968)に銭俶は北宋によって改めて「呉越国王」に封じられています。その翌年が5度目の記事にあたり、969年に「秋八月…王は宋に秘色磁器を貢ぐ」とあります。

このように、呉越国の王が五代、続く北宋からの「呉越王」「呉越国王」という統治者としての称号を認められた時に(初めの一度は称号を求めて)、その恩に感謝する形で秘色磁器を献上している状況が見られました。朝貢には様々なものを納めており「瓷器」の名称も認められますが、特に国の統治者としての地位を認められた時に「秘色磁器」と記していることから、当時における越窯秘色磁器に対する名声の高さや呉越国王の自負と共に、特別なものであったことが窺えます。

最後に、6度目の秘色磁器の献上は開宝六年(973)に銭俶の子である銭惟濬によって行われています。呉越国は太平興国三年(978)に銭俶が国土を北宋に献納し国が滅亡するので、最後の秘色磁器の献上は国王の冊封とは連動していません。しかし、開宝二年(969)に呉越国の中心地であった杭州の実質的な統治者が銭俶から銭惟濬に替わっており、ここに実権における世代交代が見られます。その後開宝五年(972)九月に進貢の為に宋に赴いた呉越国の使は宋皇帝より江南(南唐)を攻める準備をするよう託ります。南唐は呉越の隣に位置し、十国のうち当時呉越とともに華南に唯一残っていた国であり、975年には宋により滅ぼされます。973年の進貢は銭俶ではなく実権を執る銭惟濬から行われており、北宋に対する従属の意思を秘色磁器の献上によって表したととれます。秘色と謳われた青磁を生産した越州窯を手中に収めていた呉越国より、陶磁器の持つ政治上の役割の一端を探りました。

(図1は筆者撮影、図2は東京国立博物館・NHK『唐の女帝・則天武后とその時代展』1998年、図3は上海人民美術出版社『中国陶磁全集4越窯』1981年より転載させていただきました。 学芸部部員 瀧朝子)



図1



図2



図3

図1 杭州の慈雲嶺石刻(呉越国時代)
図2 法門寺衣物帳碑拓本(部分) 法門寺博物館
図3 青磁龍文四耳罍 銭元瓘墓出土 浙江省博物館

季刊 美のたより No.164

平成20年10月11日

発行 大和文華館